

あった」と中心集落が移ろい易いものであるにせよ、その変遷の一時期の集落景観を復元して、中世独自の世界を提示した本書によって冒頭の問いは減じるであろう。

二、三の疑問を記させて頂くと、著者の指摘の如く戦国城下町は①領主の居館②家臣団の居住域及び③城下市町から構成される。とくに一部二部では①②はほとんど無視されている。戦国期の中心集落の階層を問題とする時、①②をある程度捨象しなければ得られない結論かもしれない。それは、現代都市を扱った中心地理論も、やはり商業を重視して、他の機能を軽視する点と軌を一にしている。また城館と市町及び市場町をセットして論じた10章の場合は、逆に階層構造は無視せざるを得なかった点に示されている。

第二に城下市町の階層を示す名称が、国人領主、戦国大名という歴史用語で示されている。地理学的手法で区分した町を、地域差、時期的変化の大きい歴史学の用語を借用して呼ぶのは誤解の生まれる危険を感じさせられる。

用語に関しては、8章の類型化された町の名称が「在町」「地方都市」と記され、前章と不統一なものが見受けられる。

最後に読者への便を考えてみると、本書は著者の綿密な調査と歴史学の深い素養を背景に書かれている。本書の初めから読み進むと大半の読者は迷路に入ってしまう可能性がある。終章・序章・8章を読んだうえで、1章から読み始めれば、中心地理論を念頭においた、大きな構想のもとに、着実な実証を積み重ねた著者の意図が十分に伝わってくるであろう。

最後に本書の内容を不十分な理解で評した部分は紹介者の浅学故とお詫びしたい。（水田義一）

菊地利夫著：続・新田開発一事例編：古今書院

1986年5月 A5判 758頁 15,000円

歴史地理学研究で、過去、菊地氏の『新田開発(上)、(下)』古今書院(1958)、同書改訂増補版(1977)ほど他分野に影響を与え、かつ評価された書物は少ない。この名著の続編が、このたび約30年の歳月を経て公刊された。事例編と銘打つ本書は、氏が主として30歳代に精力的に実地踏査された新田村の事例研究のうち、再調査、加筆された17編からなっており、総論編にあたる前書の作成過程を知るうえでも、ま

た、氏独自の歴史地理学方法論（『歴史地理学方法論』、大明堂、1977）を理解する上でも、非常に貴重な意義を持つ書物である。まず、本書の構成を次に示しておこう。

序章 新田の理論、事例論文の背景と意義

第1章 武蔵野の開拓路村とその土地生産力―青梅街道の開拓路村小川村を中心として―

第2章 隠遁武士の見立新田としての新島料十六島新田

第3章 見立新田の開発者に与えられた除地の経営―信濃国五郎兵衛新田の事例―

第4章 滝名川二十七堰懸りの水利慣行と扇状地の開発過程

第5章 信濃国松川扇状地の畑作新田の開発と田成畑の諸問題

第6章 笠懸野扇状地における代官見立新田としての開拓路村とその開発意義

第7章 片品川流域における近世山村の二面的性格の展開

第8章 小櫃川上流における畑作村落から水田村落への転換

第9章 九十九里浜のイワシ漁業の豊凶と臨海集落における新田開発

第10章 日川砂漠における柳川新田の開発

第11章 干潟八万石の干拓と用水・排水の諸問題

第12章 村受干拓としての飯沼新田の諸問題

第13章 九十九里平野における塚崎新田の開発と「池田」の排水権慣行

第14章 先進地型町人請負新田としての大宝前（神戸）新田の諸問題

第15章 福田沖新開の開発と地域経済の近代化

第16章 熊本藩の村受新田としての百町新地・四百町新地・七百町新地の諸問題

第17章 弘前藩の新田開発―小知行派・御蔵派・藩営新田

付章 近世全国国郡石高帳の解説（国別・郡別の石高表）

各章の記載内容については、各々その原論文がすでに各種雑誌に発表され読者の目にとまってきたことと、本書序章に著者自らの手でコンパクトにまとめられていることにより、ここで改めて紹介することは割愛したい。

さて、事例編とはいえ、単なる事例研究の羅列ではなく、上記17編は氏の新田の理論の構想にしたが